
とある少年の異世界物語

g g

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある少年の異世界物語

【コード】

N3536BA

【作者名】

gogo

【あらすじ】

なんか良く分からないうちに少年が変なことに巻き込まれてとりあえず生き残ろうと頑張るお話。

第一話（前書き）

まず言えるのは、下手くそです、そのことをご了承ください
あと、ノリで書いてます、先がどうなるのか自分でもわかりません

苦手なことは人助け

嫌いなことは無償奉仕、ただ働き

好きなことは寝ること、ゴロゴロすること

趣味は、アニメ・映画・格闘技の鑑賞、読書

備考 幼いころから元海兵隊だった叔父さん（父親の妹の旦那）から海兵隊式格闘技ビックフットを習い、祖父から柔道・空手・剣道を叔母（父親の妹）から合気道を、叔父の友人から古式ムエタイを習い腕前は良くも悪くもないが体は鍛え続けた。

親友の上杉陸に巻き込まれて大嫌いな無償奉仕活動で

不良に絡まれた少女やヤクザに売られそうになった美少女

を助け、助けた手柄は陸に持っていかれ

裏社会ではその強さから畏れられ

表社会では根も葉もない噂で恐れられている

その強面のせいでヤクザと勘違いされることもシバシバ・・・

「まったく、お前のせいで俺は、何もしていないのに怖がられているんだぞ

お前俺がなんて呼ばれてるか知ってるか？」

陸「？」

「鬼、闘神、悪魔、ケンカ屋、プレデター、史上最強の害虫・・・」

陸「顔怖いからね」

「それに比べお前は・・・成績優秀運動神経抜群容姿端麗品行方正俺とは真逆で、女子からはモテモテ、勇者とか王子様とか呼ばれている・・・

まあ、その中世的っていうか女に近い顔のせいで一部男子にも人気・

・

どこの無敵超人！？あらゆるニーズにこたえました！？」

陸「まあまあ、落ち着けよ」

「はあ・・・ん？」

陸「どうしたんだ？」

「陸……」

陸「なんだ？」

「お客様だ……」

前を見ると、少女が立っていた

おそらく中学生であろうその小さな体に見合った

かわいらしい手には、ラブレターと思われる

封筒が握られている。

顔は整っていて頬には朱がさしている。

少女「あ、あの！」

陸「なんだい？」

少女「これ、私の気持ちです!!」

そういつて手紙を差出て陸が受け取るのを確認するなり
走って行ってしまった

陸「ん」

「そうしたんだ？」

陸「名前を聞き損ねた」

「そうかい、どうせ断るんだろ？」

陸「まあね」

「もつたいない、結構かわいい子だったじゃないか」

陸「いや、僕にはもつたいない、彼女にはほかにふさわしい
人がいるよ」

「……そうかい……ならばもう言っまい」

陸「ありがとう」

しばらく談笑しつつ歩いていた

何時もの帰宅道をいつも道理に……

だが、その時ばかりは違った・・・

陸「・・・なあ海・・・」

「なんだ？」

陸「何か聞こえないか？」

「いや・・・なにも聞こえないが」

陸「近づいてくる・・・」

「あん？」

すると、いきなり陸の足元に魔法陣みたいのが現れた
どうやら陸を引き込もうとしているようだ

「おゝ陸wwwよかったな勇者様に選ばれたぞwww」

陸「そんなこと言ってないで助ける!!」

「wwwお前なら大丈夫さwww」

陸「こうなったら!!」

その場から立ち去ろうとしたとき

陸「逃がすか！」

「なっ!!!!」

陸が俺の脚をつかんだ、突然のことで反応できずそのまま・・・

陸「死ぬときは一緒だ!!!!」

「放せ!!!!」

・・・・・・・・・・・・・・・・

・
・
・

「ん、んん？」

もうろうとする意識を無理やり起こし、周囲を確認する
暗かった視界が闇に慣れ視界が鮮明になる

「っ！」

周りには人がいた、松明に火を灯し始めたのか視界に光が入る
俺は、すぐさま立ち上がり情報を集める

（人数は・・・12、3人・・・うち6名は革製と思しき鎧に短槍、
腰には剣

ほかには2人が金属製のフルプレートアーマーに武器はレイピア・
・
後は神官か何かか）

次に俺は陸を蹴って起こす

陸「ん、んん？なんだ？ここは？」

すると、少女が一人陸に近寄る

？「大丈夫ですか？」

俺は、とっさに身構える

「!」

兵士と思しき達も槍を構え、騎士と思しきやつも、レイピアを抜く

「ここはどこだ!、貴様らは何者だ!何が目的だ!」

?「あゝ」

先ほどの少女が近づいてくる

「貴様は何者だ!」

少女に怒声を浴びせる、少女がビクリと震える

兵士が槍の穂先を俺に向ける

それに対して俺は、兵士に対して蹴りを浴びせる

兵士1「ぶふっ!」

そのまま、うつむいている兵士を羽交い絞めにしてすぐに首をへし折れる

体制にする。

騎士1「その男を離せ!」

「その前に俺たちをさらった理由を言え!」

両者の間に緊張が走る、首筋を冷たい汗が伝うのを感じる

陸「まあまああ、海その人を話放してあげなよ」

「・・・」

緊張は解けた、陸の能天気な声を聴いた瞬間あきれた
相手の騎士も剣を収めた、兵士たちも構えを解いた

俺も兵士を解放した

陸「え〜ととりあえず今どうなってるの？」

？「わたくしが説明いたしますわ」

陸「君は？」

アリア「わたくしの名はアリア・バレッタリート・ダイ・バレンシ
アーネ

この国の第3王女ですわ、アリアとお呼びくださいませ」

陸「僕は陸、上杉陸、陸って呼んでくれ」ニッコ

アリア「！、わ、わかりましたわ」

(落ちたな)

アリア「ところでリクさま」

陸「なに？」

アリア「この男は？」

陸「ああ、こいつは海・・・俺の親友だ」

「武田海だ」

アリア「ふんっ」

どうやら最初のいざいざで好感度は悪いようだ

アリア「ところでリク様」

陸「？」

アリア「どうかこの世界を救ってくださいますか？」

陸「僕にできることなら何でもするよ」

アリア「あ、ありがとっございませす！...」

その後、別の部屋に連れて行かれいろいろな説明を受けた後
王の間の連れて行かれる

王「勇者リクよお主は我らに何をもたらす？」

リク「は！私は自分の持てる力のすべてを使いこの国に、この世界
に平和を

もたらすことを約束します」

王「うむ」

王は満足したようにうなずいた

王「ではこれより宴を執り行っ！」

王の宣言とともに音楽が流れ始め、陸はたちまち人に囲まれる

(相変わらずだな)

？「お主」

「ん？あんた誰？」

レイア「私はレイアこの国の第2王女だ」

「そうかい、でその王女様が俺に何のようだ？」

レイア「お主が気に入った」

「ああ？頭おかしいんじゃないの？」

レイア「そんなことを言われるのは初めてだ」

「で、俺が気に入ったって・・・なぜ？」

レイア「まずお主は、召喚されてすぐに起きた」

「ふむ」

レイア「そしてすぐに、現状の把握と情報の収集に努めた」

「それで」

レイア「決してひるまず、堂々としており槍を向けられても顔色一
つ変えなかった」

「……」

レイア「あまつさえ、その兵士を倒し人質にするまでの一連の流れが洗練されていた

しかも精鋭の騎士の殺気に怯むどころか逆に殺気で返した」

「……」

レイア「ほめておつたぞ、決してあの男とはたたかいたくないとな」

「……」

レイア「他のものは、リクに好感を示し勇者と言っているが、私はお主のほうか

勇者に向いている気がするぞ？」

「冗談言つな、勇者なんて柄じゃない……それにただ働きなんて冗談じゃない」

レイア「報酬は出るのだが」

「名声なぞいらん」

レイア「なら何がほしいのだ？」

「平穩」

レイア「……」

「……」

レイア「くく、くく、ははははははは！」

「……」

レイア「面白い、ますます気に入ったぞカイよ！」

？「レイアさま」

レイア「んん？ああ、お前か」

声のするほうを見ると、一人のメイドが立っていた

銀色の髪をショートカットにしたとてもスタイルのいい人だった

レイア「カイよ紹介しよう、私の専属の召使いローズだ」

ローズ「お見知りおきを」

「カイだ好きに呼んでくれ」

ローズ「ではカイ様と」

レイア「ローズよ今日はめでたい日だ私とカイが出会った日だ祝いに酒を飲もう」

ローズ「かしこまりました、カイ様は何にしますか？」

「ウイスキーをロックで」

ローズ「ウイスキー？」

「ああ、すまん・・・何でもいい強い酒をくれ」

ローズ「かしこまりました」

彼女はどこかに飲み物を取りに行った

(つゝか美女・美少女率高いな)

ローズ「お待たせしました、レイアにはワインを、カイ様にはこのアカシアを」

渡されたのは

(まんま、ウイスキーだ)

レイア「では、乾杯」

ローズ「乾杯」

「乾杯」

互いに杯(俺のはグラス)を軽くぶつけてから口に運んだ

(味も、ウイスキーだ・・・)

レイア「お主、酒に強いのか？」

「なぜ？」

レイア「その酒は普通は果実のしぼり汁で薄めて飲むものだぞ」

「そうなのか」

ローズ「はい」

「俺はこれが普通なのだが」

.....

レイア「ん〜程よく酔ってきたぞ」

レイアの顔は少し赤身を帯びている

ローズはあまり飲まないため変化はない

ローズ「正直ここまで強いとは・・・」

レイア「予想だにしなかったぞ」

「？」

レイア「そんなに飲んで、まだ素面なのか」

「そんなにつて、たいしたことないけど」

レイア「お前は、オーガかタイタンか？」

「なんだ？それは」

ローズ「オーガは酒とケンカが好きな粗暴な蛮族です

タイタンは筋骨たくましくその肌は岩のように固い

巨大な体の種族です」

「へ〜」

すると

リク「よお、カイ！」

「お前か」

リク「どうも親友がお世話になっています」

レイア「うむ」

ローズ「それほどでもありません」

リク「ほら、カイもつと飲むぞ！」

「はあ〜・・・」

リク「はははははっは」

・・・

・・・

・・・

・・・

翌日

リク「う〜・・・頭痛い・・・」

「あんなに飲むからだ」

リク「カイはなんでそんなに強いんだ？」

「いろいろあつたんだ・・・」

今日はやるいろいろある

まずは

アリア「魔法適正を調べるのですわ」

リク「どうすればいいの？」

いまおれたちは、不思議な部屋にいた、部屋の中央に祭壇がありその周りを囲うように水晶玉が置かれた台座が八つあった

アリア「この祭壇の上に立ってください」

陸が進む

アリア「次に精神を集中して、心を空っぽにするのです」

しばらくすると、台座が光だした

アリア「もういいですよ」

リク「ふう〜」

台座を見ると一つ目は何も無い二つ目も何も無い

三つ目も変化はない四つ目は変化があった

茶色い紋章が浮かんでいた

五つ目は何も無い六つ目はすごかった

光ってる太陽のごとく光っている

七つ目と八つ目は何もなかった

アリア「リク様は光と大地ですよ」

「やったじゃん勇者っぽくて」

次に俺も同じように祭壇に立ち精神を集中した

結果は、一つ目から変化があった

燃えている、赤々した火柱が立っている

二つ目は凍り付いていた

三つ目は放電していた

四つ目は特になし

五つも特になし

六つ目も特になし

そして七つ目は

アリア「これは!!」

リク「どうかしたの」

アリア「闇!あなたは闇属性ですわ!」

「へえ」

リク「何かやばいの?」

アリア「昔から闇属性は魔に落ちるといわれていますその証拠に魔王は闇の魔法を使いますし

闇族の人の多くは魔に落ち多くの人を苦しめましたわ」

「へえ」

アリア「これは大変なことになりましたわ」

リク「まあ、カイなら大丈夫さ」

八つ目は・・・

リク「鏡?」

アリア「これはわかりませんわ」

取れあえず属性がわかったので部屋を出る

リク「この後は？」
アリア「武器選びですわ」

・
・
・

武器庫

リク「へえ、いろいろあるな」
「・・・」

ほんとにいろいろあった
オーソドックスな剣や弓矢、槍などの他にも杖や指輪
さらにはこんなものどうやって使うのか使用用途がわからないもの
まで
あった

リク「・・・よし、これにしよう」

そういつてリクは一振りの剣を握る

リク「?・・・!!」

アリア「どうしました？」

リク「・・・っ!・・・はあはあ・・・すっい」
「？」

リク「ねえ、アリア」

アリア「はい？」

入っていたのはリー・エンフィールドMk？（なぜか、マガジン式でグリップが必要無いものだった

高倍率スコープ付き、弾は5.56ミリフルメタルジャケット弾）
ウィンチエスターレバーアクションM1873

シカゴタイプライター（マガジンは50発ドラムマガジン）
そして

「・・・」

（なぜ・・・なぜ、ハンドガンだけMk23？それもLAMとフラッシュライト付き？）

リク「なあ・・・カイ」

「ああ、なんでこんなものが・・・」

俺の武器は決定した。銃器の他に投げナイフ19本（わき腹に4本、腰に左右5本ずつ、右肩に5本）

刃渡り25センチほどの片刃のナイフ（背中に袈裟懸けに背負う抜くときは左手で下から）

両手にアサシンブレードと革と金属でできたガントレット、トマホーク二本（腰からぶら下げてる）

投擲用の小型の鎌四本（背中に装着）
ククリナイフ二本（後ろ腰に装備）

Mk23はレッグホルスターに、シカゴタイプライターはスリングで吊るし

M1873は背中に鞘に入れた状態で背負う、エンフィールドは背中に袈裟懸けで

現在服装はアサシンクリードのアルタイルみたいな恰好

アリア「さあ、行きましょう」

リク「どこに？」

「アリア」仲間の元へ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3536ba/>

とある少年の異世界物語

2012年1月9日03時53分発行